

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第805号 平成26年9月18日

## 「ぼっち」が怖い（2）

和田教授は、「誰とでも仲良く」という教育を行って来た事によって「友達が多い＝いい子」という価値観が蔓延してしまい、その結果、勉強やスポーツがいくら出来てもそれは「いい子」の条件ではなくなってしまうと述べています。つまり、学校での「いい子」の条件が勉強やスポーツが出来る事ではなく、「仲のいい友達がいる事」になってしまったため、自分は「一匹狼」ではなく「人気者」だと見せたいという欲求が働くという訳です。

かつては勉強やスポーツが出来る子が人気者になりました。しかし、競争を否定し、平等化教育が推し進められた事によって、教室の中に、成績の良し悪しとは関係のない序列化が明確になってきたと和田教授は指摘しています。この新たな序列化が「スクールカースト」と呼ばれているもので、これによって、いじめの様相も大きく変わって来ました。

かつていじめの対象といえば、成績の悪い子やスポーツの苦手な子、不潔な子等が多かったと思いますが、スクールカーストで重要なのは人気です。人気のある者がスクールカーストでは上位者となり、いくら勉強ができて人気がない者は下位に甘んじなければなりません。

教育評論家の森口朗氏は、子ども達は、中学や高校に入学した際やクラス分けがあった際に、各人のコミュニケーション能力、運動能力、容姿等を測りながら、最初の1～2ヶ月は自分のクラスでのポジションを探り、高いポジション取りに成功した者は、1年間「いじめ」被害に遭うリスクから免れるといい、逆に、コミュニケーション能力が低いために高いポジションを取れなければ、いくら腕っ節が強くても「シカト」といういじめを受けるリスクは当然高くなると述べています（同氏著「いじめの構造」から）。

森口氏によれば、スクールカーストの世界においては、自己主張力、共感力、同調力で構成されるコミュニケーション能力を主因としてポジションが決まるという事ですから、人付き合いの上手な社交的な子は人気者となってスクールカーストの上位の席につく可能性が高くなります。しかしその一方で、「友達がいないと見られる事」は、固定的で逃げ場のないスクールカーストに身を置く者にとっては、非常な恐怖に違いないと思います。

こうした他者の目（評判）を気にする、恐れるという精神構造は、ランチメイト

症候群という言葉があるように、決して学校の中だけではありません。お昼に、若いOL達が仲間と連れ立って食事をしている風景をしばしば目にしますが、彼女達が本当に親しい仲間同士かといえれば必ずしもそうではないようです。ランチを共にする仲間がいないと思われる事を恐れ、形ばかりの仲間に過ぎないかも知れないのです。

そういう人達に向かって「一人だってよいじゃないか。無理をするな」とは、簡単にはいえません。

「便所飯」という現象について、和田教授は、競争を排し、皆仲良く主義教育がもたらしたものだとして指摘していますが、確かに行き過ぎた平等主義には弊害は大きいと思います。学力調査反対の声があるように、学校教育に出来るだけ競争を持ち込みたくないとする人は依然としていますが、私は学校教育の中にも一定の競争原理は働かせるべきだと考えています。

競争の中から様々な差異を発見する事になりますが、その差異こそ個性なのであり、今こそ、一人ひとり違う存在としてその個性を認め、尊重する、「個性重視」の教育の重要性を認識すべきです。

少なくとも「友達が多いほどいいという価値観で子供を評価する事は止めるべきだ（和田秀樹著「なぜ若者はトイレで「ひとりランチ」をするのか」から）」というのは、私もその通りだと思います。（塾頭：吉田 洋一）